

# 宗像大社辺津宮境内「高宮出土として伝世する品」 が提起する問題について

清喜 裕二

## はじめに

本稿では、宗像大社辺津宮境内の「高宮出土として伝世する品」のうち石製模造品を取り上げ、その資料が提起する問題について論じる。沖ノ島をはじめとする宗像周辺の遺跡からは、多種多様な石製模造品の出土が知られているが、沖ノ島祭祀の実態を解明する上で、他の遺物とともに石製模造品がひとつの要素になることは確かであろう。その中でも、本稿では起点として1点の資料に注目して、そこから派生する問題について考察を進めたい。

## 1. 伝高宮出土品について

### (1) 検討の経緯

起点となる資料は、本誌第4号で福嶋真貴子氏が「高宮出土として伝世する品」（以下、伝高宮出土品）のうち滑石製不明品として報告されたものである（福嶋報告第2図-4第1図1）<sup>(1)</sup>。偶然別の資料の調査で宗像大社宝物館に伺った折、同氏より不明品として報告した滑石製品が何であろうかとの質問をいただいた。以下に述べるように、筆者は一見してその形態が岐阜県大垣市遊塚古墳から出土した鉤形の石製模造品（以下鉤形と表記）の一部によく似ているとの印象をもった。つまり、鉤形の一部と推定できるのではないかと考えたのである。しかし同時に、全形が不明であることや調整その他の特徴、分布上の問題など外形上の類似だけでは早計に結論を下せないとも感じた。そこで、まずは推定どおりの資料として位置づけが可能であるかを検討していきたい。

### (2) 伝高宮出土品の特徴

福嶋報告によれば、獣形状を呈する欠損のない完形品、もしくは刃部を欠く刀子などの柄部の可能性を挙げており、筆者の考えは後者に沿うものである。鉤形の一部と述べたが、当然全形を表しているものではなく、後述するとおり、具体的には柄尻部分に相当すると考えられる。報告によると長さ5.85cm、最大幅2.8cm、最大厚1.57cmを測る。広い範囲に茶褐色の付着物が見られ、1ヶ所の穿孔がある。付着物により表面の状態は不明瞭だが、側面では明瞭な削り痕が見られ、上端面には細かい擦痕が残る。形態上の細かい点については、既出の鉤形との比較において示していきたいが、ここであらかじめ確認しておくことは以下の2点である。断面に顕著であるが一部丸みを帯びた面もありつつ、全体としては角ばっており、作りとしては粗雑である点が、まず挙げられる。また、ところどころ石材表面の剥離もみられる。もう1点としては、明瞭な欠損部が確認できない点である。欠損しているのであれば、第1図1に図示した上端面に欠損の痕跡が残ると考えられるが、観察しても現状で明瞭な痕跡は認められない。欠損箇所を相当入念に研磨したと考えない限り、福嶋報告にもあるようにほぼ「欠損のない完形品」のように見えるのである。この点が伝高宮出土品の最大の問題点である。

## 2 鉄製鉈について

鉈形を含む農工具形の石製模造品は個別の形態や組合せなど、鉄製農工具を写し取ったと考えられ、そこには石製品として製作されるにあたって新たに付与された性格があると思われるが、基本的には鉄製品に与えられていた性格を基盤にしていたと考えられる。ここでは、鉈形の検討の素地として、鉄製鉈についてごく簡単に整理しておきたい。

### (1) 研究抄史

鉄製農工具については、弥生時代のうちに基本的な構成が生まれ、機能分化も果たしながら古墳時代に引き継がれていくことが指摘されている。鉄製鉈は、考古学の側から弥生時代における道具の鉄器化の問題と絡み、岡崎敬<sup>(2)</sup>、岡村秀典<sup>(3)</sup>、野島永<sup>(4)</sup>らの研究があり、古墳出土品について三木文雄の一連の検討<sup>(5)</sup>をはじめ、古瀬清秀の研究で大きく前進した<sup>(6)</sup>。また、田中謙が現段階での理解をわかりやすく整理しており、鉄製鉈の全体像が把握できる<sup>(7)</sup>。

また、建築に関わる側面からは大工道具としての視点で鉈の位置づけがおこなわれてきた。鉈形は古代の特に出土品としての鉄製鉈について鉄部の錆や木質の腐朽による情報の欠落を補う位置づけで紹介されることがあった<sup>(8)</sup>。村松貞次郎<sup>(9)</sup>や吉川金次<sup>(10)</sup>成田寿一郎<sup>(11)</sup>らの研究を経て、渡邊晶の研究では古墳時代以前の鉈は大工道具（建築工具）としては含めないことが明確化される<sup>(12)</sup>。

### (2) 用途

このような研究の進展状況の中、本稿で扱う鉈形の製作対象となった鉄製鉈は古墳時代前期後半～中期初頭に属するもので、その刃部の大きさなどから、およそ建築材のような大型材の表面を調整するには非効率である点、実際の建築材に鉈の調整痕と思しき跡が見出しがたい点などから、用途としては建築工具としてではなく、木工具として位置づけられている。

一方、それ以外の工具類は木工具としても建築工具としても使用できるものであることに注意しておきたい。ひとつの形態で様々な道具としての使用法があったことは既に指摘されているとおりである。実際に弥生時代から大型建物は存在しており、仮屋も多くあったと思われる。鉈にしても、古代以降の鉈のような使用法に限定しなければ、使用方法のあり方は木工具としてであっても、建築工程のある部分での使用というように少し幅広く考えることも可能であろう。

## 3 鉈形について

### (1) 鉈形の諸要素

伝高宮出土品の検討の前段階として、鉈形の各種事項について確認しておきたい。主な項目については表1にまとめた。また、必要に応じて鉄製鉈との比較にも触れていきたい。

魚津知克は、鉄製農工具と「農工具形石製祭器」の対応関係、石製化における器種選択の問題、副葬のあり方における比較検討などを行う中で、鉈形の特徴を示し、茎が長い「長茎形」、刃部幅が茎幅より広い「Ⅱ類」を形象しているとする<sup>(13)</sup>。筆者も同様に考えており、以下に挙げる鉈形に関する特徴も魚津の指摘と重なるところがある。

表1 鉈形一覧表

番号	出土地域	出土地	墳形	現存長	刃部長	茎	線刻	穿孔	柄元の削り	欠損	石材
1	中国(岡山県)	岡山県内	—	9cm	1.5cm※	長茎	×	×	○	なし	滑石
2	近畿(奈良県)	富雄丸山古墳	円墳	12.5cm	1.7cm	長茎	○茎	×	○	なし	滑石
3	近畿(奈良県)	ナガレ山古墳	前方後円墳	9.4cm※	1.8cm※	長茎	×	—	—	あり	滑石
4	近畿(三重県)	石山古墳	前方後円墳	15.8cm	3.2cm	長茎	○茎	○	—	なし	滑石
5	東海(岐阜県)	遊塚古墳	前方後円墳	15cm	3.2cm	長茎	○柄巻	○	○	なし	滑石
6	関東(群馬県)	群馬県藤岡市神田	—	13cm	2.1cm※	長茎	×	○	○	なし	滑石
7	関東(群馬県)	上野	—	10.6cm	2.2cm	長茎	×	×	○	なし	滑石
8	関東(茨城県)	茨城県内	—	13.4cm	2.5cm※	長茎	×	○	×	なし	滑石
9	関東(茨城県)	鏡塚古墳	前方後円墳	14.5cm	2.8cm	長茎	×	○	○	なし	滑石

凡例：  
 ・現存長の※は欠損が大きく全長の把握に影響を及ぼすもの  
 ・刃部長の※は先端の欠損により本来の刃部長より短いもの  
 ・刃部長は先端から柄元までを計測  
 ・茎の表記は魚津論文〔註(13) 文献〕による  
 ・—は欠損ほかの理由で確認できていないもの  
 ・欠損は意図的である可能性があるもの  
 ・石材は、慣用的に用いられる広義の滑石の意味で用いている

**個体数** 筆者の管見に触れる限り、9個体を確認している(第1図2～10)<sup>(14)</sup>。

**分布** 西から、中国地方に1個体(吉備1)、近畿地方に3個体(大和2・伊賀1)、東海地方に1個体(美濃1)、関東地方に4個体(毛野2・常陸2)、である(第2図)。分布の議論に堪えるほどの個体数ではないとも言えるが、近畿地方よりも東の地域に集中しており、東日本への偏在という形で明確な傾向が認められる。

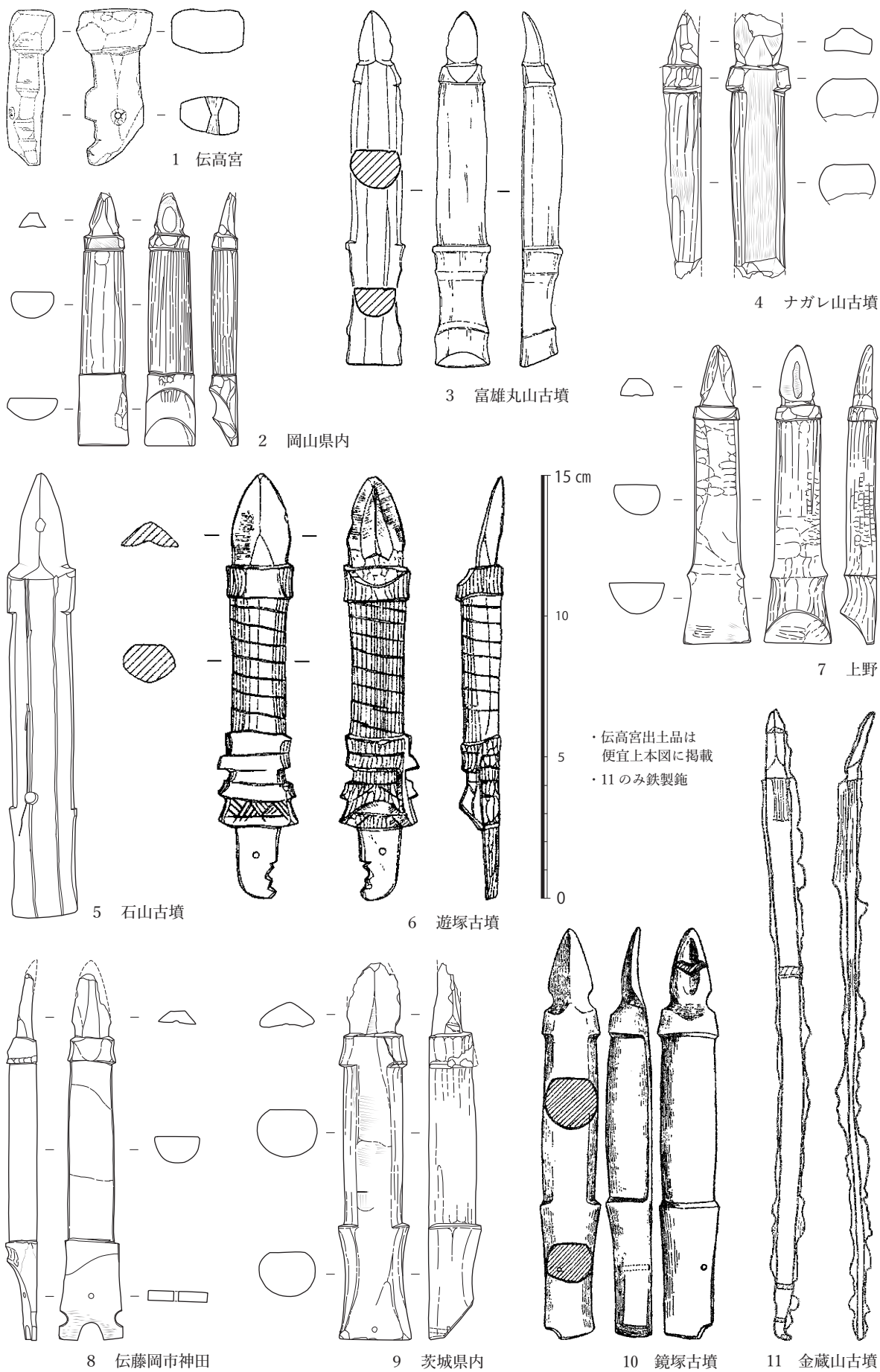
出土遺跡は明確なものはすべて古墳である。農具形製の石製模造品の多くの出土例から、出土地が明確でないものも古墳からの出土であったと考えられる。

**時期** これまでにも指摘されてきているように、農具形の出現当初に存在するが、短期間のうちにみられなく器種である。おおむね古墳時代前期後半から中期初頭の間 positioning つけられよう。

**形態・表現** 鉈は構造として鉄器部分(刃部・茎)と木器・骨角器部分(柄)から構成され、鉈形はそれらが石材で一体的に製作されているが、構造や意匠がわかるような表現が施されている個体が多い。

【刃部】平面形としては、茎幅より広い刃部を表現したものが多くと考えられ、石山古墳出土品は茎幅と同じであるタイプの可能性もあるが、石製品でもあり、意図した表現かどうかは判断が難しいものもある。側面形は先端に向かって上方に伸びる形態を示し、鉄製鉈に通有の形態といえよう。また、裏すきが明瞭に表現されている個体が多い。刃部長は最も長い遊塚古墳、石山古墳出土品で3.2cmを測る。これは、田中が示すように当該期の鉄製鉈の刃部長が3cm程度であるとされていることと矛盾しない。

【茎】茎の表現は、魚津が示すとおり「長茎式」で占められる。茎尻が柄から突き出ている状態を表している遊塚1号墳出土品(第1図6)を除くと、刃部から2本の並行する線刻を施すことにより、茎部を表現している個体を挙げられる。富雄丸山古墳出土品(第1図3)、石山古墳出土品(第1図5)があり、それ以外は線刻がないが、柄の表面が平滑であることから表現が省略されたと考えられる。また、茎尻が柄の中に納まっている状態が表現されている例が多いが、実際は茎尻が突き出ているものは多いと思われ、石製品故の省略であると考えられる。



第1図 鉞形・鉄製鉞実測図 (Scale=1/2)



【柄】柄はただの持ち手というよりは、刀装具のように一定の意匠をもっているようにもみえる。平面形態としても側面形態としても、削りを多用した曲線的な形状が特徴的である（第1図8、10など）。横断面のうち、特に持ち手部分は蒲鉾形を呈するものが多い。装着方法は基本的に共通していると考えてよいだろう。

また、側面形態については1点新たに気づいたことがある。第3図に挙げた写真は、宮大工の方が使用されている鉈である<sup>(15)</sup>。柄元下端部を斜めにカットしている（矢印箇所）。これは削りの作業を行う際に、柄元の下端部が材に当たってしまうことを避けるためご自身で削ったものである。刃部の反り具合や刃部のどのあたりを使用するかによって変わってくるため、必ず削るものでもないとのことであったが、鉈形の側面形を観察すると、富雄丸山古墳出土品をはじめ、少なくとも6個体について同様の形状を確認できる。石製の加えられた意匠である可能性はあるが、大型化してくる前の古墳時代前期後半から中期初頭の時期にみられる鉄製鉈の刃部は短いことが指摘されており、使用にあたって柄元が材に当たることは十分に考えられよう。鉈形が当該期の鉄製鉈をかなり忠実に写し取っていると考えられると同時に、その鉄製鉈が実用品であった可能性が高いことも示しているといえよう。

田中が良好な事例として挙げる中峰2号墳の鉄製鉈（第4図4）<sup>(16)</sup>と富雄丸山古墳の鉈形を比較すると（第4図3）、柄部の形状が酷似していることが注目されるほか、莖尻が鉤状になるものは先の中峰2号墳や金蔵山古墳出土の鉄製鉈（第1図11）と遊塚1号墳出土の鉈形（第4図2）で共通するなど、過度な誇張や省略はなかったとみてよく、これは鉈形と共伴する各器種についても概して当てはまる。鉄製鉈の場合は木製の柄の細かい形状までの把握が難しいことを考えると、鉈形の個体数は少ないが、鉄製鉈の復元的な所見を得るにあたって腐朽しにくい石製品の素材的特性が生かされているといえる。

しかし、多くの鉄製鉈がこれらと同様の特徴をもっていたかどうかはわからないところが多く、装着方法の違いもあるが、多くは正倉院の工匠具のように単純な棒状の柄で簡素なものが一般的であったとも考えられる。時期は下るが宮崎県えびの市島内21号地下式横穴墓出土品のように横断面が円形を呈する鹿角製の柄が装着されている例もある。それなりの多様性をもっていたと考えられよう。

**大きさ** 全長は最も大きな石山古墳例が15.8cm、最も小型品は岡山県内出土例で9cmである。鉄製鉈の中には鉈形より長いものも多くみられ、田中が挙げる良好な状態で残る中峰2号墳や板切遺跡出土品は20cm前後である<sup>(17)</sup>。短い個体も存在するが、そのような個体を積極的に写し取ったというよりは、長さに関しては、製作時に準備できる石材の大きさに左右され鉄製鉈と同サイズの製作に至らない場合が多かったと考えられる。

**個体間の共通性** 全体として、平面・側面形態、横断面等、共通性が高いことを指摘できる。製作にあたって一定の仕様のようなものがあり、それがかなり守られているような状況が推定される。しかし、特定の場所で製作されたものが展開しているような状況は認められない。その中でも、遊塚1号墳出土品は特に精巧な作りである。

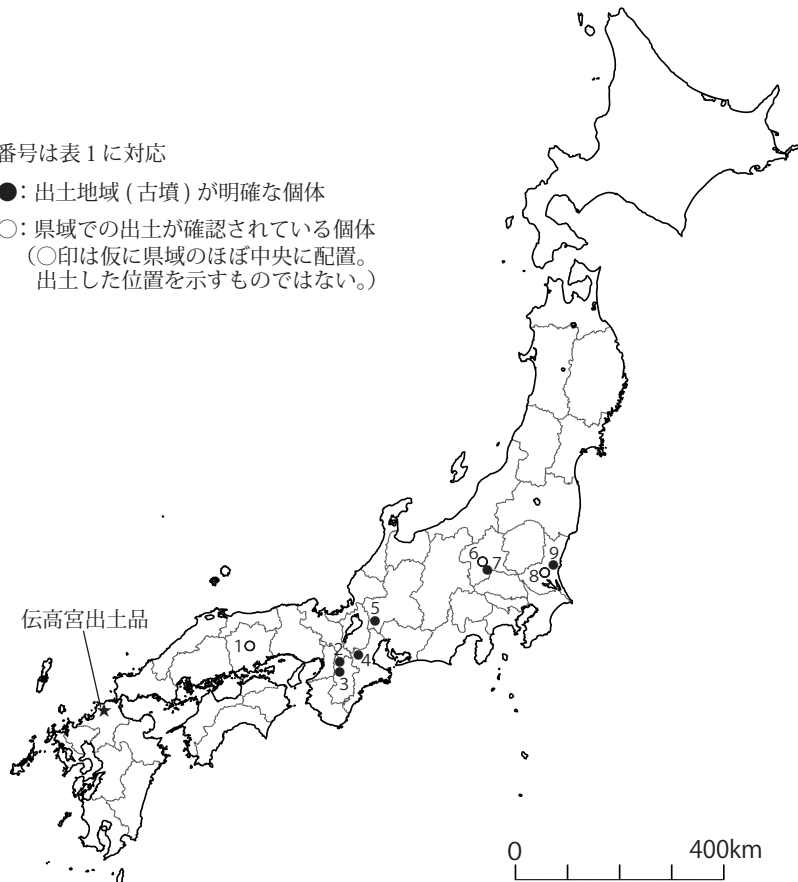
## （2）鉈形との組合せ

これまでも指摘されているとおり、この鉈形は単独で存在するものではなく、刀子・斧（袋状、短冊形、板状）・鉈・鑿・鎌など弥生時代から次第に出揃ってきた基本的な鉄製農工

具の組合せを継承した古墳時代の鉄製農工具を反映して石製化したの中で一器種である。また、鉄製品としては短冊形<sup>(18)</sup>など一部を除き各器種が存続していくが、石製模造品としては、刀子形、斧形、鎌形が存続する一方で、鉈形は早々に姿を消し、同様の器種として斧形（短冊）、鑿形が挙げられる。このことにより、この三種については組合せにかなり有意な関係があったと推測される。石山古墳、遊塚古墳、鏡塚古

番号は表1に対応

- ：出土地域（古墳）が明確な個体
- ：県域での出土が確認されている個体  
（○印は仮に県域のほぼ中央に配置。出土した位置を示すものではない。）



第2図 鉈形分布図

墳の良好な出土状況を示す事例をみても、一部欠くものもあるが、基本的にこれらは組合せとして存在していると解してよいだろう。よって、東博所蔵の茨城県内出土品として鉈形があるが、そのほかに斧形（短冊）や斧形があり、石材の特徴をみても本来の組合せを反映していると考えられ、群馬県伝藤岡市神田出土品の鉈形と鑿形なども同様であろう。また鉈形はないが、群馬県前橋市総社町附近出土品（斧形（短冊）、鑿形）や千葉県香取郡小見川町一ノ分目 1-272 出土品（刀子形、斧形（短冊）、斧形）なども、良好な事例に類する組合せであった可能性が高い。

この視点でみると、東北歴史博物館所蔵の杉山コレクションの鉈形は、出土地が「上野」であり、同じく所蔵されている刀子形・斧形と組合せ関係にあると考えられ、さらにその刀子形・斧形の特徴が群馬県高崎市下佐野長者屋敷古墳のものと同じであることから、同館所蔵の鉈形と刀子形・斧形は本来同古墳に副葬された石製模造品の一群を構成していた可能性が高いと考えられる。現在知られる同古墳の石製模造品の器種構成は、刀子形、斧形、鑿形で鉈形を欠いており、組合せを復元的にみても矛盾はない。

ただし、千葉県多古町多古台No.8-6 号墳のように、未盗掘資料で緑色凝灰岩製石釧を共伴することから、築造時期としては上記の古墳などと並行関係にあると考えられるものの、石製模造品としては刀子形、斧形、鎌形の組合せのみが確認されている事例や群馬県高崎市吉井町の片山1号墳も刀子形と斧形の組合せである。必ず鉈形、斧形（短冊）、鑿形が組合せに加わるわけではないことに注意が必要である。

ここで重要なのは、鉈形だけのカウントにとどまらず、これらの資料も加えていくと、



第3図 鉈 柄元の削り

さらに関東地方での事例が増え、偏在の様相がより顕著になるということである。

### (3) 伝高宮出土品との比較

ここでは伝高宮出土品と鉈形とを細部まで対比しつつ検討したい。検討にあたって先にもふれたように、9個体が知られるうちで遊塚古墳出土資料の特徴に比較的近いと考えられることから、直接的に比較するとともに、標準的形態として富雄丸山古墳出土資料、鉄製鉈として中峰2号墳出土資料も配置した(第4図)。対応すると考えられる細かい部位の範囲を線でつなぎ、アルファベットを振った。

**鉈形の基本形態** 鉈形は、第4図に示したようにA～DもしくはEで示した4～5の部位で構成されている〔A:刃部、B:柄元、C:柄、D:柄尻、E:鉄茎端部〕。AとEが鉄器の露出部、B～Dが素材としては木質を中心とする柄部分を表現していると考えられる。柄は部位としては分かれるが一体で製作されているものであろう。

**部位** 第4図のとおり、伝高宮出土品は鉈形のうち、D・Eに該当する部分と考えられる。Eの部位を確実に表現しているといえるものは、不明なものを除くと現状9例の中でも遊塚例のみである。

**遊塚古墳出土例との比較** 鉈形の形態は共通性が高く、特にA～Cの部位は形態上ほとんど差はなく、Dの違いやEの有無によって区別され、Dの表現も一定のパターンに収まるものである。その中で、Eを確実に表現している点、D・Eが複雑かつ精巧な作りをもつ点で、遊塚例は他の個体と一線を画する特徴をもつといえる。

伝高宮例は、部位Eの存在とその端部形態が、遊塚例にもっとも類似する個体であるといえるため、遊塚例と比較してみる。

【平面】以下の3点が挙げられる。1) Dの柄(柄尻)を表現したと考えられる部位で幅が広がる。2) 鉄柄(E)端部を鉤状に曲げた表現が類似する。3) 鱗飾の表現が明瞭である

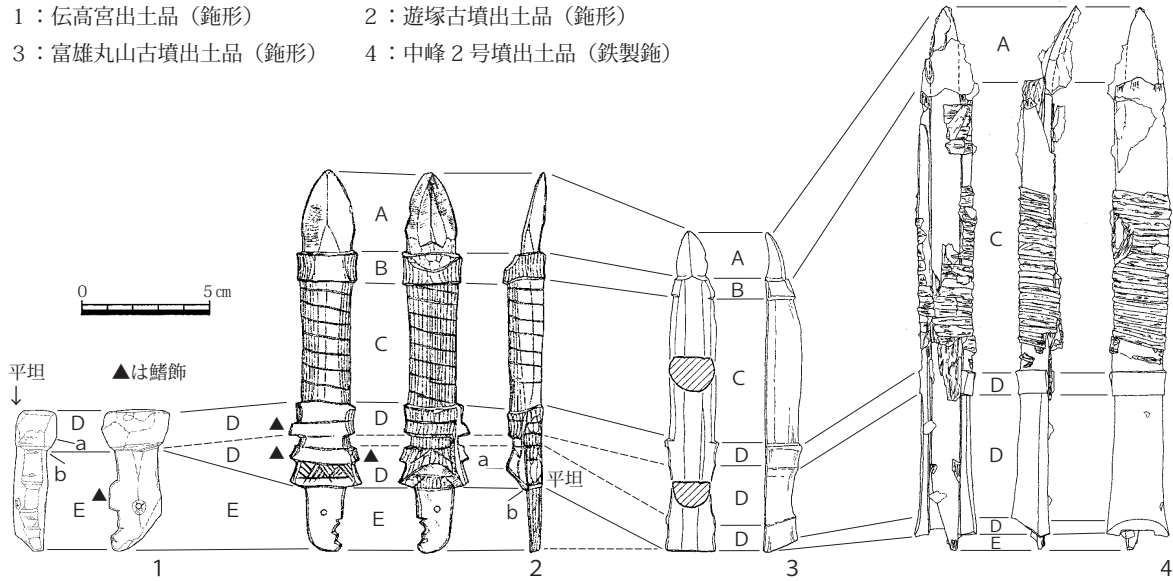
【側面】ケバ線a・bで示した段差と反対面の平坦面の存在は、鉈形の側面観に特有といえる。

【大きさ】各部位では幅・厚みに違いがあるが、D・Eを合わせた長さはほぼ同じであり、全体のサイズ感も鉈形を大きく逸脱したものではない。しかし、鉄茎端部の表現としてはかなり厚く、全体の作りも丁寧さに欠けるなど、基本的に精製品である鉈形としては、現状知られている個体の中でもっとも大作りの個体といえそうである。

【その他】穿孔の位置もほぼ同じ箇所である。

個体ごとに特徴が異なる部分もあるため、すべて1対1の対応関係とはいかないが、おおむねきれいな対応関係を示すといえよう。鱗飾と考えられる部分やEが鉤状に屈曲しているなど、細かい点も一致している。特に側面からみると、他の9個体ほどきれいな仕上がりではないが、鉈形の特徴である鉄器部分を装着する側が平坦で、反対面に段差がみられる点は表裏を意識して作り分けていることがうかがえる。

- 1：伝高宮出土品（鉈形）      2：遊塚古墳出土品（鉈形）  
 3：富雄丸山古墳出土品（鉈形）      4：中峰2号墳出土品（鉄製鉈）



第4図 鉈形・鉄製鉈部位比較図 (Scale=1/3)

以上のことから、伝高宮出土品は、木器部分の柄尻と柄から抜き出た鉄器部分の茎であると理解できそうである。しかし、鉈形9個体と比較して、製作上の丁寧さにおいて懸隔が大きく、形態上もっとも類似すると考えられ、鉈形の中でももっとも精巧といえる遊塚古墳出土品と対照的である。

なお、鉈形は古墳出土が通有であると考えられるが、本資料については高宮出土ということ以外詳しいことは知られていない。ただ、上高宮古墳が副葬品に銅鏃が含まれるなどその様相から古墳時代中期前半とされており、比較的時期も近いことから候補のひとつであるとはいえそうである。

ここまでみてきた通り、伝高宮出土品が鉈形の一部であることに矛盾はなさそうである。しかし、当初から一部だけの造形にとどまると考えるのは、他の資料はすべて全形を表現していることから不自然であろう。中井正幸も指摘しているとおり、儀礼に伴う所作などによる欠損の可能性が指摘されている事例もあり、欠損自体が珍しい訳ではない<sup>(19)</sup>。当面のところ、本来は刃部・柄部を含めた全形の資料であったものが欠損して、その部分を研磨によって平滑にした可能性を考えておきたい。ただし、欠損部はそのままの状態であることが多く、鉈形として認定できるかどうかは保留すべき点があることも明記しておきたい。

#### 4 鉈形をめぐる視点

ここまで、伝高宮出土品がいかなる遺物であるかの検討に紙面を割いてきた。鉈形との認定に保留すべき点はあるものの、既出資料との比較により一定の見通しは得られた。

ひとまず鉈形と考えた場合に、次に問題となるのは、農工具形が希薄というより現状皆無の地域において、その存在の可能性があることの意味であろう。それを探るために、本章では幾つかの視点で考えてみたい。特に鉈形を多く出土している関東地方の様相についてみておくことは有効と考えられる。そこから得られた見通しで、改めて宗像や沖ノ島に



ついて考えてみることに多少なりとも意義が見いだせるのではないだろうか。

### (1) 鉤形の分布

あらためて、鉤形の分布をみておきたい。関東地方の様相は後述するとして、まず近畿地方をみると、奈良盆地北部の富雄丸山古墳と西部のナガレ山古墳からの出土である。近畿地方の中にあつて鉤形を含む農工具形の創出にあつて、関係が深いとされる古墳が展開する地域である。また、石山古墳は東海地方を目前に控えた上野盆地の一角に位置する。中国地方は吉備である。刀子形が出土する金蔵山古墳などは出土地の候補であるが、特定することは難しい。現在の岡山平野南側は内海が広がっていたことが知られているが、そこからやや西に位置する鞆の浦は、瀬戸内海の東西からの潮の干満の分かれ目であり、海上交通の要衝といえる。

一方、東に目を向けると、遊塚古墳が近江から伊吹山の南を抜けて濃尾平野が広がり始める地に築かれている。関東地方は出土地が不明の個体もあるが毛野の2点は、いずれも現在の高崎市、藤岡市あたりの出土とみられる。信濃から碓氷峠を越えるルートや荒川低地沿いに北上するルートなどの結節点にあたる。常陸は、1個体は出土地不明であるが、鏡塚古墳が太平洋を望む那珂川河口域に築かれており、海上・河川交通の要衝として評価される地から出土している。

以上のことから、鉤形（を含む構成をとる農工具形）は陸上、海上、河川などの各種交通の要衝、境界域に築かれた古墳から出土していることがわかり、まずはそのような側面をもつと考えられる。

### (2) 農工具形の構成

現在の鉄製鉤を含む弥生時代からの鉄製工具の組合せの流れから考えるならば、鉤形は木工具としての用途を主としつつ、建築の場面を含む、ある程度幅広い機能も想定できると考えられる。ここで、鉤形を含む出土例での農工具形の器種を挙げていくと、〔農具〕：鎌・鋤、〔工具〕：鉤・鑿・斧（手斧含む）・斧（短冊形）・刀子、となる。農具は、魚津が指摘しているように、鏡塚古墳の鋤を除くと鎌に限られる。手鎌の可能性のある資料もあるが、確定は難しいという<sup>(20)</sup>。これは鉄製農工具の構成を忠実にトレースしている状況ではなく、工具が主体を占める様相といえ、木工具・建築工具を祭器として石製化したと考えることができよう。また、木工にしる建築にしる工程ごとに必要な器種を揃えているような構成と考えることもできる。農具に限られていることとは対照的ともいえよう<sup>(21)</sup>。

### (3) 関東地方の様相

**境界域と鉤形** 分布の様相からは、これまで古墳の立地について語られることの多い交通の要衝、境界域という側面をまずは指摘できそうである。しかし、交通の要衝や境界域は日本列島の中に幾つもあり、それだけではなぜ関東地方に分布が偏るのか、農工具形であるのか、ということへの説明としては不十分である。これまでも古墳の副葬品から当時の「東国」や「アヅマ」の範囲や境界を検討する研究はあるが<sup>(22)</sup>、古墳時代前期において前方後円墳は仙台平野まで広がりを見せている<sup>(23)</sup>。当時の王権が領域としての境界に強い意識があり、広がりを志向するのであれば、鏡塚古墳築造時期には分布域前端的古墳に農工具形が副葬されていても不思議ではない。それが、毛野・武蔵・常陸と限られた地域に集中的にみられる状況は、当時の王権が考える領域の広さではなく、そこに集中す

る特別な意味を持った地域（境界域）であった可能性があるろう。

石製模造品と呼ばれる遺物は、ヤマト王権の東国進出という脈絡で理解されることが多く、その側面はこれまでの研究が示すとおりであるが、拡大や進出の段階を示すとという以外の意味もあるように思われる。

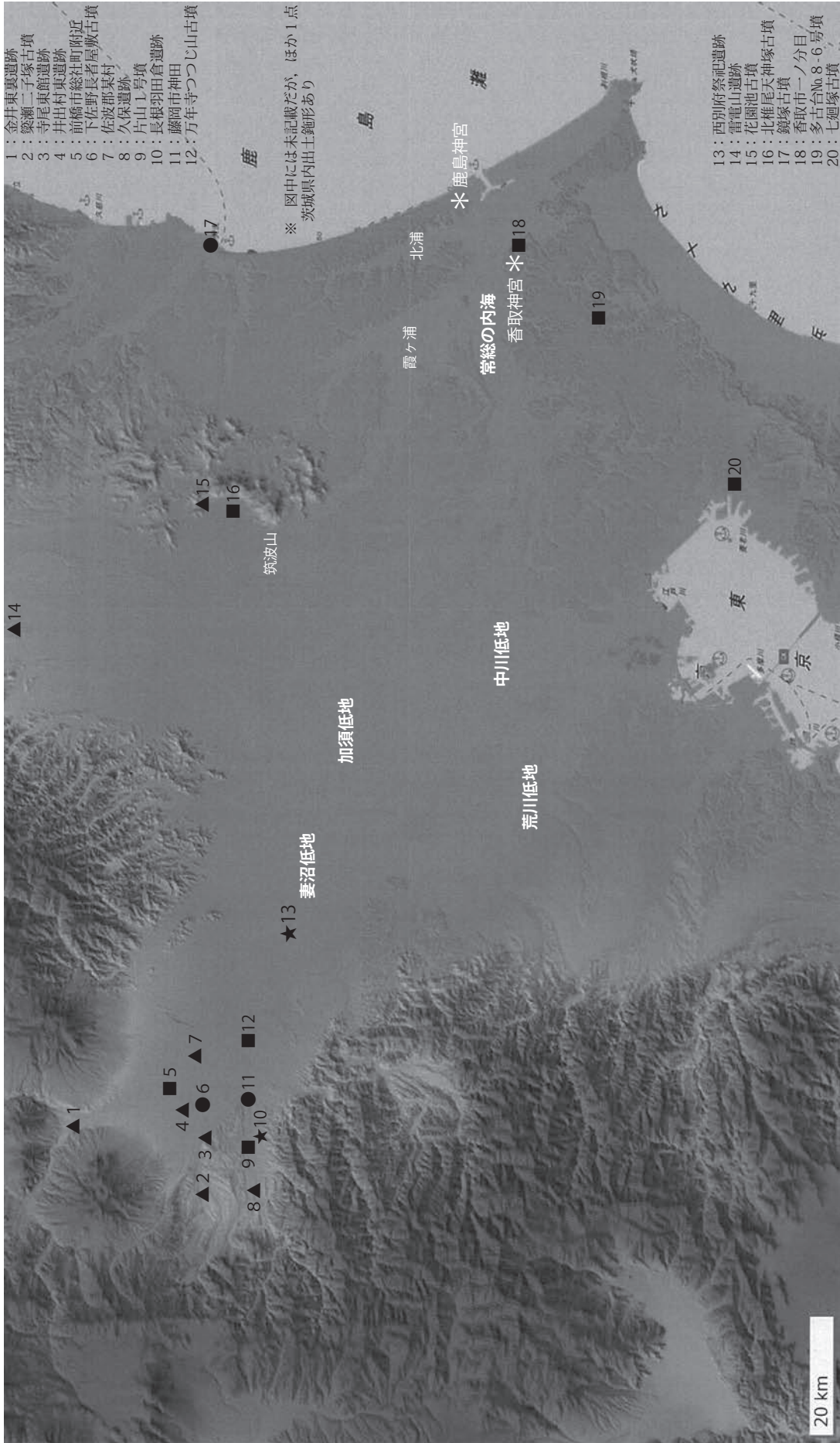
**低地と内海** 日本列島の多くの地域で海浜部に内海や潟湖が形成され、これが古代の地域間ネットワークを支えたことは既によく知られていることである。先にみたように関東平野は列島最大の平野部であるが、「関東造盆地運動」<sup>(24)</sup>の影響で地盤の沈降により地中に沈み込む遺跡も多い<sup>(25)</sup>。よって、特に妻沼低地、加須低地、中川低地と低地部が広がる武蔵北部から東部では安定した平野が形成されにくく微高地と後背湿地が続く景観が広く形成されており<sup>(26)</sup>、古墳時代には、前期から果敢にこの低地部への働きかけがあったことが指摘されている<sup>(27)</sup>。武蔵はこのように、川・沼・湿地帯の織り成す景観が東京湾に向けて広がっていくとともに、下総台地にも接続していくが、常総地域に入ると「香取海」や「常総の内海」（以下、「常総の内海」とのみ表記）と呼ばれる内海世界に変わっていき、当該地域の環境を視野に入れた研究の蓄積も多い<sup>(28)</sup>。この時、下総と武蔵の間には分水界が形成されているが、その標高は低く千葉県関宿付近では10 m程度で、「人間の目には到底識別できないような、ほんのわずかな地形的高まり」だという<sup>(29)</sup>。また、台地部分でも河川をうまく使うことで、効率的に常総の内海世界に接続していたことが知られる。これは、東京湾と「常総の内海」の間でも同様である<sup>(30)</sup>。よって、視覚的にも武蔵の低地部と常総の内海は遮蔽されるような関係ではなく、地形と水をめぐる環境の上では一体の地域として捉えなおすことができると考えられる。このようにみると、武蔵の低地部と「常総の内海」を挟んで西側一帯（内陸側）に毛野、東側一帯（海側）に常総地域という位置関係で把握できるのではないだろうか。

そこに、鉈形を含む農工具形、鉈形はないが並行すると考えられる農工具形、及び後述する古墳時代後期の武器形などの分布を重ねてみる（第5図）。粗密はあるものの、低地と内海をめぐる範囲に多くみられることが確認できよう。

**王権の世界観** それでは、なぜ上記の地域に集中するのであろうか。交通の要衝、特に水上交通に関わる部分については、既にこれまでの研究で明らかにされているとおりである。それ以外の理由が考えられるのか、異なる視点からのアプローチを試みてみたい。

北條芳隆は、太陽・星の運行や山並、火山などの既にある自然環境との関わり、観測などを経て、例えば弥生時代から古墳時代の「方位理念」として東西優位があり、「日の出方位」が重視されてきたことを示した<sup>(31)</sup>。鉈形を含む農工具形が近畿地方より東方、しかも関東地方にかなり集中的に分布することに対して、これまで「東国」という「範囲」が対象として考えられることが多かったように思われるが、器種や構成によってはこれとは異なる側面、「方位」に基づいた分布の可能性も加えうのではないかと考えられる。

関東地方を境に北東へ折れ曲がる列島の地形からは、関東以北の地域が、東に太平洋と面することになるが、東が太平洋に面していることに加えて、国土の表現として、8世紀には「豊葦原水穂国」（『古事記』）「豊葦原瑞穂国」（『日本書紀』）と呼ばれる、代表的な景観がある<sup>(32)</sup>。葦原と水域の広がるこの景観は古墳時代に列島各地で見られたであろうが、ここまで広大な範囲に広がる場所は他にないであろう。東が太平洋と面し、内陸（西）



- 1: 金井東裏遺跡
- 2: 築瀬二子塚古墳
- 3: 寺尾東遺跡
- 4: 井出村東遺跡
- 5: 前橋市総社町附近
- 6: 下佐野長者屋敷古墳
- 7: 佐波郡長村
- 8: 久保遺跡
- 9: 片山1号墳
- 10: 長根羽田倉遺跡
- 11: 藤岡市神田
- 12: 万年寺つじ山古墳

※ 図中には未記載だが、ほか1点  
茨城県内出土鉦形あり

- 13: 西宮府祭祀遺跡
- 14: 雷電山遺跡
- 15: 花園池古墳
- 16: 北椎尾天神塚古墳
- 17: 鏡塚古墳
- 18: 香取市一ノ分目
- 19: 多古台No.8-6号墳
- 20: 七廻塚古墳

●: 鉦形出土地    ■: 鉦形と関係が深い石製模造品出土地    ▲: 武器形石製模造品出土地    ★: 馬形石製模造品出土地

第5図 関東地方関連遺跡の分布



に向かって広がる葦原という二つの条件を備え、さらに、そこに視界を大幅に遮る山塊などもない地形的な特徴を加味したとき、ヤマト王権がその一帯に特別な意味を見出した可能性を考えたい。つまり、後の国土観の表現つながらる原初的なイメージをヤマト王権がある程度もっており、王権所在地の東において、それに叶う地域として認識したことによると考えられないだろうか。また、その海の先には大和王権にとって重要な理念上の世界(仮にカミの世界とする)が設定されていたかもしれない。

太平洋を望むカミの世界に向けての、毛野から常陸(鹿島)に至る広大な奥行をもつ境界域が形成されたと考えられないだろうか<sup>(33)</sup>。

櫛引台地の縁辺部あたり、現在の埼玉県熊谷市付近から東へと広がっていた妻沼低地、加須低地、中川低地には葦原の広がる湿地帯が多かったと考えられ、その中を沼や河川などの水域を利用しつつ、明瞭な内海の広がる常総地域や総武地域(東京湾方面)に入っていくことは、実際の距離以上にスピード感のある移動が可能であったとも考えられ、王権からは毛野から常総地域が地域性を越えたある種の一体性をもつという認識を形成したと考えられる。鉤形などを含む農工具形石製模造品の構成から見た毛野・常総の様相は、この古墳時代前期後半のヤマト王権が考える東方の世界観に支えられたものであったと考えられる。

そして、そのひとつの表れとして(農)工具形の導入があったのではないかと考えてみたい。鉄製工具は石材に対しても相当の効力を発揮すると考えられるが、一番の対象は木材に対してであろう。そこから工具形の性格を考えてみると、木材の伐りだし、木材加工全般、特に祭具製作や祭祀に関わる機能をもつ建築物造営などに関わる一連の作業に必需品として使用されることに依拠することで、祭器として石製化した可能性が考えられよう。分布からみられる(農)工具形の存在の背景として、交通の要衝との関係性に加えて、関東地方においては王権の世界観とそれに伴う祭祀・儀礼との関わりを推定しておきたい。そしてそれらは、工具の使用目的でもある各種製品の製作や建築物の造営等に関わるものであったのだろう。

しかし、水路のみでは常総地域には到達できないため、王権の世界観とは別に、地形などから古墳時代以前に形成されてきた在来の領域があったのではないかと考えられる。これが、石製模造品を個別に検討して見えてくる地域による製作体制の違い<sup>(34)</sup>や刀子形の形態のまとまり<sup>(35)</sup>に反映しているのではないかと考える。

つまり、鉤形などを含む石製模造品には、在来の領域に規定された製作に関わる位相と、王権の世界観・空間認識を基にした器種構成に関わる位相を見出すことができると言えよう。

**佐紀古墳群と工具形** 佐紀古墳群は馬見古墳群とともにその出土数の多さから農工具形の創出と展開に関わった人物が被葬者像として考えられることが多い。鉄製農工具という弥生時代以来の伝統的な副葬品をベースにしつつ石製化という形で新たに祭器を登場させるが、鉤形などの欠落など初期の豊かな構成は程なく縮小してしまう。この動向の理解は簡単ではないが、主導した当初の意義が何らかの理由により早々に失われたと考えられる<sup>(36)</sup>。一方、北條は佐紀古墳群が前後の大型古墳群とは異なる方位理念で築造されるが、程なく「伝統方位軸への軌道修正」がはかれるとする<sup>(37)</sup>。この軌道修正の契機が鉤形



などの欠落に影響を与えたか否かは即断できないが、寺沢知子がこの時期の政権が「脆弱な体制」であったと指摘しているように、佐紀古墳群造営とも関係する創出に関わった勢力の動きと連動する可能性も想定しておく必要がある<sup>(38)</sup>。

さらに、ここでは工具形の存在意義を考えるために、佐紀古墳群との関係をみておきたい。先に工具形は鉄製工具の使用目的に関係する行為に伴って行われた儀礼とのつながりで石製化したと考えたが、一番の対象が木材で、それによって製作、建造されるものということになる。北條は、佐紀古墳群の造営にあたって当該地域での開発に触れ、方位との関係も含めた計画的な古墳の配置を指摘し、開発範囲の移動、拡大を「大型前方後円墳の築造地は開発指向領域と一致する」として、若狭徹の指摘との関係で評価している<sup>(39)</sup>。この動向で重要なのは、林野を新たに伐開すると同時に伐り出した木材の利用が行われた可能性が高いことであろう。そして、これらの一連の事業の具体的な作業工程において鉄製工具が大いに力を発揮したことは想像に難くない。

加えて、木材の利用と一口に言っても、開発地において伐採された樹種が利用目的に合致する特徴を持っているとは限らず、日常生活あるいは開発に伴う利用目的に対して必要な樹種などの様々な需要を満たすために、開発地のみならず別途の森林開発も並行したことが推測される。青柳泰介は、奈良盆地東部山間地域で古墳時代初頭から有用樹種の変化に伴い、他地域に供給するための木材生産が開始された可能性の高いことを指摘した<sup>(40)</sup>。さらに、木材の奈良盆地への搬入ルートとして佐紀古墳群を挟む形で「秋篠越え」と「ウワナベ越え」の2ルートを考え、西側の「秋篠越え」ルートと佐紀古墳群西群の築造と菅原東遺跡や西隆寺下層遺跡など大規模遺跡との関係を考える。また、築造が東群へ移動するに伴い、「ウワナベ越え」の必要性が出てきたことも推測する。佐紀古墳群の造営と現地の開発が木材生産とも絡みつつ活発に行われた状況が想定されよう。

また、これと同様の状況が毛野においてはかなり具体的に確認されており、その古墳築造のあり方は「象徴行動」と表現される<sup>(41)</sup>。古墳の築造のみならず居館の建築、低地の開発など、木材利用が日常生活を越えたレベルで行われ、製品や資材へと姿を変えていたことが考えられる。さらに、この時の最大規模をもつ浅間山古墳の墳形は、佐紀古墳群西群の佐紀陵山古墳と同じ墳丘規格が採用されているとの指摘も示唆的である。

このような奈良盆地や毛野西部での動向から、木材利用の高まる需要に鉄製工具の必要性、存在価値がさらに高まっていたことが推測される。このような状況が工具形出現の背景として考えられよう<sup>(42)</sup>。また、これらの動きが佐紀古墳群との関係性をもってつながることは工具形の創出とも絡み注目に値すると考えられる。

**農工具形以外の様相** これまで伝高宮出土品が鈍形であるという理解を基に記述を進めてきた。農工具形、特に工具形を中心にみてきたが、宗像・沖ノ島ではまだ確定的とは言えないため、他の資料から共通点について簡単にみておきたい。

盾形、短甲形については佐久間正明の検討があり、古墳時代後期に至り、宗像・沖ノ島と毛野・武蔵・常陸という列島の東西で石製模造品について共通化が認められる部分がある<sup>(43)</sup>。それら以外にも、子持勾玉が毛野、常陸は出土数が多く、近年は武蔵地域でも行田市北大竹遺跡で45点が出土するなど集中地帯である。さらに、西日本では宗像・沖ノ島が含まれる筑前が突出して出土数が多い点も共通点として挙げられよう。さらに、馬形

などは沖ノ島に先駆けて毛野（長根羽田倉遺跡）、武蔵（西別府祭祀遺跡）で確認されており、古墳時代後期以降は、後の宗像大社、鹿島神宮、香取神宮と神郡の設置など類似した経過をたどる<sup>(44)</sup>。

農工具形の分布の上では、現状の中にそのまま落とし込むとその範囲から大きく外れることになるが、他の石製模造品でみた場合、古墳時代後期に至り宗像・沖ノ島の祭祀と毛野・武蔵・常陸での祭祀具に共通性が指摘される。伝高宮出土品が鉤形だとすると関東地方に多く出土する鉤形とそれを含む農工具形の存在から、宗像・沖ノ島が地域の特性として鉤形を導入し得る背景をもつということもいえるのではないかと考えられる。あわせて、両地域の共通性が古墳時代前期後半頃までさかのぼる可能性を示すことにもなる。

また、列島の東西という視点では、吉野裕子は古代日本人の「基本世界像」「人間界（日本の国土）」での東西は「観念的なものとしてではなく、地理的な現実の地点としてある」として、東に鹿島の地（鹿島神宮）、西に出雲の地（出雲大社）を挙げる<sup>(45)</sup>。鹿島の地は本稿で対象とした農工具形が集中的に出土する地域の最東端にあたる。また、出雲は、出雲大社境内遺跡において、メノウ勾玉や滑石製白玉が出土し、古墳時代前期から王権との関わりが考えられる祭祀が行われていた可能性が高いという<sup>(46)</sup>。一方、常陸の内海周辺での祭祀遺跡については、現在の知見では、祭祀遺物の年代はさかのぼっても5世紀代までということである<sup>(47)</sup>。現状は少し違いがあるものの、後に重要な位置づけとなる神社の周辺には顕著な出土遺物が確認されることがあり、重要な土地であるという意識があることで、その後の神社の成立につながっていった可能性が考えられよう。

**西と東の境界域** このように西と東の祭祀をめぐる境界域について、両者がそれぞれ接する境界域の特徴を考えると、西（宗像・沖ノ島）は、朝鮮半島や中国という海を越えた先にある国家、社会から絶えず情報が入り、緊張感を伴いつつ状況によっては難しい対応を迫られる不安定で現実的な対外関係を背景とした境界域ということができよう。一方、東（毛野・武蔵・常陸）は理念としてある比較的安定した世界（カミの世界）との境界域ということができよう。同じ境界域でも異なる対象を前にすることで、あるいは王権の動向や在地の対応などによっても使用する祭器に違いが出てきて、考古資料の分布としての現状が見えてきているのかもしれない。それぞれに重層的なものを想定する必要があり、王権レベルの位相と地域レベルでの位相を読み解いていければ、それぞれの特徴をさらに見出していけるのではないかと考えられる。

## まとめ

本稿は、伝高宮出土品が鉤形であるか否かを判断するために、鉄製鉤や既出の鉤形と比較検討するところからスタートした。そして、保留すべき点はあるものの、それが認められるとの見通しを得た上で、宗像・沖ノ島の祭祀遺物の中に存在する意味を考えるために、鉤形を含む農工具形の特徴を検討して、鉤形そのものは木工具としての機能が中心と考えられるものの、他の工具形は木工や建築など幅広い木材加工具としての機能を考え、これらが林野の開発や木材加工全般に必要不可欠、特に祭具製作や祭祀に関わる機能ももつ建築物造営などに使用されることに依拠した祭器と考えた。さらに、それらが毛野・武蔵・

常総地域に多くみられることについては、古墳時代における「方位理念」との関係から王権として東方にカミの世界を設定した可能性を考え、そこに対して地理的、景観的にもっともふさわしい地域として位置づけられたことと、毛野に顕著な地域の開発とそれに伴ったであろう祭儀などと関連して集中的に分布している可能性を考えた。これは、出雲大社境内遺跡での滑石製玉類の出土など、日本列島の中での方位を意識した位置にあり、かつ後に神郡の設置を伴う神社の存在につながる共通点をもっており、この経過のもとに理解していく必要があるのではないかと考えられる。その意味で、伝高宮出土品を鉤形と考えることに一定の背景を与えるものであり、古墳時代後期に石製模造品で共通点が認められる関東地方との関係性が、古墳時代前期後半から中期初頭あたりまでさかのぼる可能性も示唆する。

鉤形の検討だけで後半に述べたような問題を解決できる訳ではなく、本稿では器種の違いの意味など考古資料の検証作業は極めて不十分である。この問題点への取り組みを経た上での当否は今後の検討課題であるが、関係地域の共通性の背景などを意識しつつ宗像・沖ノ島祭祀の理解につなげていければ、と考えている。引き続き、さらに視野を広げて取り組んでいきたい。

## 謝辞

本稿作成にあたって、資料調査や実測図の掲載等において、下記の皆様、機関に多大なるご配慮を賜った。以下に記して感謝申し上げたい（敬称略、五十音順）。

小野章太郎、河野正訓、菊池望、谷川一雄、中井正幸、伴祐子、福嶋真貴子、古谷毅、間壁忠彦、間壁茂子、森郁夫、山本亮、吉村公男

大垣市歴史民俗資料館、河合町教育委員会、木組み博物館、京都国立博物館、倉敷考古館、國學院大學博物館、東京国立博物館、東北歴史博物館、宗像大社宝物館

## 註

- (1) 福嶋真貴子2018「下高宮を中心とした辺津宮境内発見の祭祀品について」『沖ノ島研究』第4号 53-58頁 「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産推進会議
- (2) 岡崎 敬1956「日本における初期鉄製品の問題—壱岐ハルノツジ、カラカミ遺跡発見資料を中心として—」『考古学雑誌』第42巻第1号 14-29頁 日本考古学会
- (3) 岡村秀典1985「木工具」『弥生文化の研究』第5巻 道具と技術Ⅰ 65-76頁 雄山閣
- (4) 野島 永1993「弥生時代鉄器の地域性—鉄鎌・鉤を中心として—」『考古論集 潮見浩先生退官記念論文集』433-454頁 広島大学文学部考古学研究室  
野島 永2000「鉄器からみた諸変革—初期国家形成期における鉄器流通の諸相」『国家形成過程の諸変革』75-102頁 考古学研究会
- (5) 三木文雄1953「古墳時代前期の鉄製木工具」『日本考古学協会彙報 第12回総会研究発表要旨』18-19頁 日本考古学協会  
三木文雄1957「古墳出土の鉤に就いて」『考古学雑誌』第42巻第3号 37-46頁 日本考古学会  
三木文雄・村井崑雄1957「鉤について(鉄製工具の考察2)」『小川町古代文化研究会編 那須八幡塚』120-131頁 吉川弘文館  
三木文雄・村井崑雄1957「けずり小刀について(鉄製工具の考察3)」『小川町古代文化研究会編 那須八幡塚』131-136頁 吉川弘文館

- (6) 古瀬清秀1977「古墳出土の鉈の形態的変遷とその役割」『考古論集』257-270頁 松崎寿和先生退官記念事業会  
古瀬清秀1991「鉄製農工具」『古墳時代の研究』8 古墳Ⅱ 副葬品 71-91頁 雄山閣
- (7) 田中 謙2017「木工具」『モノと技術の古代史 金属編』13-51頁 吉川弘文館
- (8) 中村雄三1967『図説 日本木工具史』新生社
- (9) 村松貞次郎1973『大工道具の歴史』(岩波新書867) 岩波書店
- (10) 吉川金次1984『斧・鑿・鉈』(ものと人間の文化史51) 法政大学出版局
- (11) 成田寿一郎1984『木の匠—木工の技術史—』鹿島出版会
- (12) 渡邊 晶2004『日本建築技術史の研究—大工道具の発達史—』中央公論美術出版  
なお、今後の検討課題として「鉈屑」の問題も指摘されている。  
青柳泰介編2003『南郷遺跡群Ⅲ』(奈良県立橿原考古学研究所調査報告74) 奈良県立橿原考古学研究所  
平井洸史2022「南郷大東遺跡の「鉈屑」について」『青陵』第166号 1-4頁奈良県立橿原考古学研究所
- (13) 魚津知克2005「鉄製農工具の副葬と農工具形石製祭器の副葬」『古代』第118号 79-103頁 早稲田大学考古学会  
そのほか、鉈の構造に着目した既往の研究を踏まえて、古墳時代の鉈装具について理解が深まっているが、近年のそれらの研究に対照させると、磯貝龍志による刃部がコテ状を呈し、柄は柄縁を一回りたく作出する2類に該当すると考えられる(2a類か2b類かの峻別は困難である)。  
磯貝龍志2019「鉄鉈」『伯耆国分寺古墳の研究』35-42頁 鳥根大学法文学部考古学研究室 伯耆国分寺古墳研究会  
また、平井洸史による鉄身Ⅲb類、装具落込式2a類に該当すると考えられる。あるいは蓋を有する2b類の可能性も考えられる。  
平井洸史2021「古墳時代鉈装具の基礎的検討」『技と慧眼—塚本敏夫さん還暦記念論集—』55-66頁 塚本敏夫さん還暦記念論集事務局
- (14) 註(13) 文献に岡山県内出土を追加。
- (15) 木組み博物館長である谷川一雄氏、及び同氏を通じてご紹介いただいた宮大工の方から鉈について色々とお教示いただいた。記して感謝申し上げたい。
- (16) 倉吉市教育委員会編1998『中峰古墳群発掘調査報告書』倉吉市教育委員会
- (17) 註(7) 文献
- (18) 以下、短冊形の斧形のみ斧形(短冊)と表記して、個体数の多い袋状の斧形については、単に斧形と表記する
- (19) 中井正幸1993「古墳出土の石製祭器—滑石製農工具を中心として—」『考古学雑誌』第79巻第2号 31-61頁 日本考古学会
- (20) 註(13) 文献
- (21) 農具形については別途検討すべきであるが、ここではいったん対象を工具形に絞ることとしたい。また、刀子形についても、魚津が指摘しているように「刀子固有にこめられた副葬意識」は筆者も認められると考えている。石製模造品は葬送儀礼との関わりも深いと考えられており、その多義性には注意したい。
- (22) 徳田誠志1993「第二のアズマの前期古墳—その特質の検討—」『関西大学考古学研究室開設四十周年記念 考古学論叢』129-186頁 関西大学  
松尾昌彦2011「古墳時代前期における「東国」の範囲」『東国の地域考古学』151-162頁 六一書房
- (23) 藤澤 敦2018「弥生時代後期から古墳時代の北海道・東北地方における考古学的文化の分布」『国立歴史民俗博物館研究報告』第211集 447-486頁 国立歴史民俗博物館



- (24) 日本地質学会編2008『日本地方地質誌3 関東地方』朝倉書店
- (25) 堀口万吉1981「関東地方中央部における考古遺跡の埋没と地殻変動」『地質学論集』No.20 79-94頁  
日本地質学会  
堀口万吉1981「歴史時代の沈降運動と低地の形成」『アーバンクボタ』No.19 6-9頁 株式会社クボタ
- (26) 久保純子2007「常総の内海」香取平野の地形と歴史時代における環境変遷『中世東国の内海世界』39-64頁 高志書院  
久保純子2011「関東平野中央部における旧石器時代以降の地形変化」『季刊 考古学』第115号（特集 低地の考古学）89-92頁 雄山閣
- (27) 黒濟和彦2011「利根川・荒川中流域地域」『季刊 考古学』第115号（特集 低地の考古学）29-31頁 雄山閣
- (28) 白井久美子2002『古墳から見た列島東縁世界の形成—総武・常総の内海をめぐる古墳文化の相剋—』（千葉大学考古学研究叢書2）平電子印刷所
- (29) 高橋雅紀2022「東京湾の誕生と成り立ち—東京湾がそこにある理由—」『土木技術』77-11 7-13頁 土木技術社
- (30) 青山宏夫2004「干拓以前の潟湖とその機能 樺海と下総の水上交通試論」『国立歴史民俗博物館研究報告』第118集 193-217頁 国立歴史民俗博物館  
田中 裕2012「古墳と水上交通—茨城県域とその周辺及び「畿内」の古墳立地を比較して—」『第17回東北・関東前方後円墳研究会大会 シンポジウム 東日本における前期古墳の立地・景観・ネットワーク 発表要旨資料』67-80頁 東北・関東前方後円墳研究会
- (31) 北條芳隆2017『古墳の方位と太陽』（ものが語る歴史36）同成社  
北條の一連の研究を本稿に絡めて考えるならば、後述する佐紀古墳群に関する部分のほか、重要なポイントとしてあと1点挙げることができよう。平原1号墓の検討から「日の出農事暦」の存在を考え、墓と農事が密接な関係にあることを示した点である。墓に農事暦を読み取る機能が付加されていることが示されたことで、これまでとは別の視点から鉄製農具や農具形が墓（古墳）の副葬品として重要な位置を占める理由の一端を示していると考えられる。  
筆者は、鉄製農具・農具形がもつ諸要素を検討するにあたって、示唆に富む成果と考えている。
- (32) 西郷信綱1999「豊葦原水穂国とは何か—その政治的・文化的な意味—」『思想』No.895 56-74頁 岩波書店  
西谷地晴美2009「水穂国の変換と統治理念」『国立歴史民俗博物館研究報告』第152集 329-356頁 国立歴史民俗博物館
- (33) ただし、毛野は東日本の中での結節点として多様な位相を内包していると考えられ、その側面のひとつという理解が実態に即していると考えられる。
- (34) 佐久間正明2011「関東地方における古墳出土石製模造品の製作構造について」『考古学研究』第58巻第2号 54-73頁 考古学研究会
- (35) 清喜裕二2010「東日本における農具形石製模造品出現期の様相」『比較考古学の新地平』331-340頁 同成社
- (36) 註（13）文献において、魚津は異なる系統の祭器を統合する動きの中で欠落していった可能性を指摘している。
- (37) 註（31）文献  
北條芳隆2009「第二の『大和』原風景—佐紀古墳群と平城京条坊地割—」『日々の考古学』2 243-262頁 東海大学考古学研究室
- (38) 寺沢知子2017「古墳の属性と政権動向—4世紀前半期を中心に—」『纏向学研究』第5号 55-94頁 桜井市纏向学研究センター

- (39) 若狭 徹2002「古墳時代の地域経営—上毛野クルマ地域の3～5世紀—」『考古学研究』第49巻第2号 108-127頁 考古学研究会
- (40) 青柳泰介2009「木材の「原材」生産と流通に関する一考察—奈良県東部山間地域での古墳時代～中世の事例をもとに—」『木・ひと・文化～出土木器研究会論集～』43-54頁 出土木器研究会
- (41) 若狭 徹2018「東国における古墳時代地域経営の諸段階 上毛野地域を中心として」『国立歴史民俗博物館研究報告』第211集 307-350頁 国立歴史民俗博物館
- (42) 小林行雄は、「・・(略)・・鉄製農具や・・(略)・・鉄製工具が古墳の副葬品の中に加えられている理由は、実はこれらが古代の祭儀の実施に欠くことのできない土木建築用具として取り扱われたから・・(略)・・」と述べる。  
 小林行雄1956「古墳文化 社会生活の向上」『図説 日本文化史大系』1 縄文・弥生・古墳時代 220頁 小学館  
 そのほか、石山古墳出土農具形石製模造品の写真図版解説に「神霊を祭るには、そのための祭物がある。祭場建設は大工道具が象徴し得る」との記載がある。  
 小林行雄1960「天皇家の伝承」『図説 世界文化史大系』20 日本I 196頁 角川書店  
 また、北山峰生は生産具形の石製模造品の意義について、「社会の方向性と首長の性格を視野に入れて、初めて理解できる」と指摘しており、特に古墳時代中期における治水や新田開発などの推進を求められた首長の役割との関係の中で把握すべきという重要な指摘を行っている。これは、本稿で考えた内容とも通底するものであり、持ち続けるべき視点であろう。  
 北山峰生2005「古墳出土の石製模造品」『古墳時代の滑石製品—その生産と消費—』（第54回埋蔵文化財研究集会発表要旨・資料集）157-180頁 第54回埋蔵文化財研究集会事務局  
 鉢形など程なく姿を消すような工具形については、日常の定例的な行為に付随する祭儀とは別に、それまでとは異なる大規模な開発や建築物などの出現などを契機にそれに伴う祭儀用具として、既に出現していた他の滑石製品（祭器）に加わる形で新たに石製化したと理解することもできようか。そして、その動向に深く関わった有力者が葬られた古墳に副葬されたと考えられよう。
- (43) 佐久間正明2017「武具形石製模造品考」『考古学雑誌』第99巻第1号 1-46頁 日本考古学会
- (44) 笹生 衛2012『日本古代の祭祀考古学』吉川弘文館
- (45) 吉野裕子1974「古代日本人における世界像と現世世界像」『日本古代呪術 陰陽五行と日本原始信仰』7-38頁 大和書房
- (46) 松尾充晶2019「古墳時代の祭祀と玉—出雲における石製模造品の展開—」『古墳時代の玉類の研究』（島根県古代文化センター研究論集第21集）143-158頁 島根県古代文化センター
- (47) 石川 功2011「霞ヶ浦周辺地域」『季刊 考古学』第115号（特集 低地の考古学）35-37頁 雄山閣  
 塩谷 修2011「古代筑波山祭祀への視角—内海をめぐる交流・交通と祭祀の源流—」『東国の地域考古学』219-242頁 六一書房

表1に挙げた資料の文献・所蔵機関

- 1 倉敷考古館編1969『古代吉備の鉄』倉敷考古館（所蔵：倉敷考古館）
- 2 八賀 晋1982『富雄丸山古墳・西宮山古墳出土遺物』京都国立博物館（所蔵：京都国立博物館）
- 3 泉森 皎1990「河合町ナガレ山古墳の調査」『季刊 明日香風』第36号 飛鳥保存財団  
 河合町教育委員会生涯学習課編1998『ナガレ山古墳：国史跡』河合町（所蔵：河合町教育委員会）
- 4 京都大学文学部考古学研究室編1993『紫金山古墳と石山古墳』京都大学文学部博物館（所蔵：京都大学総合博物館）
- 5 大垣市編2011『大垣市史 考古編』大垣市（所蔵：大垣市歴史民族資料館）

- 6 東京国立博物館編1983『東京国立博物館図版目録』古墳遺物篇（関東Ⅱ）東京国立博物館（所蔵：東京国立博物館）
- 7 東北歴史博物館編2004『古墳時代関係資料図録 杉山コレクション』東北歴史博物館（所蔵：東北歴史博物館）  
金田一京助・杉山寿栄男1943『アイヌ芸術』第3巻（金工・漆器篇）第一青年社
- 8 東京国立博物館編1980『東京国立博物館図版目録』古墳遺物篇（関東Ⅰ）東京国立博物館（所蔵：東京国立博物館）
- 9 大場磐雄・佐野大和1956『常陸鏡塚』國學院大學考古学研究報告第1冊 綜芸舎（所蔵：國學院大學博物館）

#### 挿図出典

第1図 1：註（1）文献 第2図4を転載

2：筆者実測・トレース

3：八賀 晋1982『富雄丸山古墳・西宮山古墳出土遺物』京都国立博物館 第8図1を転載

4：筆者実測・トレース

5：京都大学文学部考古学研究室編1993『紫金山古墳と石山古墳』京都大学文学部博物館

39頁図版49の写真をトレース

6：大垣市編2011『大垣市史 考古編』大垣市 833頁第24図を転載

7：筆者実測・トレース

8：筆者実測・トレース

9：筆者実測・トレース

10：大場磐雄・佐野大和1956『常陸鏡塚』國學院大學考古学研究報告第1冊 綜芸舎 第18図を転載

11：註（10）文献 172頁（二）図を転載

第2図 筆者作成

第3図 筆者撮影

第4図 1：註（1）文献 第2図4を転載

2：大垣市編2011『大垣市史 考古編』大垣市 833頁第24図を転載

3：八賀 晋1982『富雄丸山古墳・西宮山古墳出土遺物』京都国立博物館 第8図1を転載

4：註（16）文献 第30図F 1を転載

第5図 筆者作成 下図は国土地理院 地理院地図GSIMapsを使用。また、武器形の分布は註（43）文献を参考にした。

